

コンゴ伝道に見る異文化接触 (48)

おやさと研究所准教授

森 洋明 Yomei Mori

1999年以降、コンゴブラザビル教会は内戦からの復興を歩み始めることになったが、大きな問題が一つ残っていた。それは、会長が内戦の途中で病氣療養のためにパリに行っており、教会には不在のままであることだった。また、彼の病状からコンゴへの帰国はかなり困難な状況にあった。

2000年になると、隣国のキンシャサに避難した人たちもブラザビルに戻り、街全体が活気を取り戻し始めていた。教会ではバゼビバカ・ピエール氏（現教会長）や前会長の子どもたちが中心となって、活動の再開・復興に尽力していた。鼓笛隊活動の復活やコーラス隊の発足、新たに教義研修会の開催など、会長が不在ではあったが、信仰の2代目の人たちが教会を盛り上げていこうとしていた。

その中で変化が現れたのが、2000年3月に「コンゴ天理教会臨時運営委員会」が発足したことだ。これは会長が教会に不在の中でも、教会の運営を潤滑に行うための臨時委員会であるとし、名誉委員長には会長夫人が、現地の実行的委員長には会長の長男の名前があった。また、バゼビバカ氏は副委員長として財政や運営、人事の担当となっていた。

この臨時運営委員会発足に当たって、委員会の会則も作成されていた。その第二章「委員の構成と役割」の項では「委員長は、天理教コンゴブラザビル教会を暫定的に代表し、委員会のメンバーを任命および罷免する統括者である。」となっていた。つまり、委員長がすべての権限を有するとともに、実質的には教会において、会長の長男が「後継者」であるという立場が明確になったことを意味していた。また、この会則にはノソंगा会長自身の署名もあった。

海外部への打診や相談もなく、現地から一方的に発足が通達された委員会ではあったが、日本人布教師がすぐに送れる状況ではなく、また病氣療養中の会長との教会の将来に関する話し合いは何度も決裂していたので、海外部としてはとりあえず教会の復興を最優先とし、しばらくはこの臨時運営委員会の様子を見ることになった。

そのような中、私と高井久太郎氏（現海外部庶務課長）がコンゴに中期の滞在の予定で出向くことが決定した。1989年以降途絶えていた日本人の教会内での滞在を念頭においたもので、出向の目的の一つに内戦で傷んだ日本人教職舎の修理があった。復興支援という一環では鼓笛の指導や教義研修会も予定していた。さらに社会情勢の調査も重要な任務だった。そして最も重要な目的として、この臨時運営委員会が現地の信者の総意の下で機能しているかどうかを見極めることであった。病氣療養中の会長の後継者問題が表面化してきている状況で、この臨時運営委員会をどのように判断するのかは、それからのコンゴ伝道を大きく左右することになり、今にして思えばその責務は大変重いものであったと感じられる。

私たちの訪問は2000年8月から9月にかけてだった。教会は活気に溢れていた。その前年の訪問では、教会や周辺地域は内戦の傷跡が生々しかったが、1年後にはみんなが生き生きと生きて、それぞれに役割分担をして教会の活動復興に取りかかっていた。その時の様子は、『海外部報』428号～430号に

「節から芽が出る」の中で報告している。当時教会には、左官や家具職人、水道や電気工事などができる人が集まっていたので、日本人教職舎の修理はそうした人たちが中心となって行われた。教職舎の修理はコンゴの教友にとって、教会復興のシンボルとなっていたようだ。鼓笛の指導や教義研修会にもみんなが積極的に参加し、復興に意気込む彼らの熱意が感じられた。

確かに活気に溢れた教会の様子から、臨時運営委員会は表面的には機能していたと言えるだろう。しかし、バゼビバカ氏をはじめ多くの信者が、それはあくまで「暫定的」であると捉えていて、本当の復興のためには日本人布教師にもう一度教会の責任者となってもらうことを期待していた。ただその中で会長家族だけは、常駐する日本人の必要性を訴えつつも、「次期後継者もコンゴ人でなければならない」とし、日本人の役割は教会における本部の「海外事務所」的なものになることを思い描いていたようだ。

滞在中、さらに大きな問題として確認されたのは、本部から送られる教会の運営助成費が、パリ在住の会長のところで止まっており、この臨時運営委員会にはその一部しか届いていないことだった。つまり、活動の再開を期して臨時運営委員会が発足しても、その資金を預かる者が全ての権限を持ち、その用途に関して誰もコントロールできない状態だったのである。こうしたところは、同じく復興の途中にあったコンゴ社会の現実と重なって見えた。

1ヶ月半にわたる滞在を終え、私たちが下した結論は、この臨時運営委員会に任せられないということだった。確かに教会運営面では、活動の進め方において機能していたようだが、最終的決定権の所在や教会助成費のあり方を見れば、それまでとは全く変わっていなかった。また、委員長の言動や教会運営のあり方は、政治的、戦略的であり、決して宗教的ではなかったと思われた。そして、圧倒的多数の信者は日本人が教会の責任者になることを望んでいる事実もあった。このようなことから、日本人が新たに教会の芯として、活動を進め、教会の復興に取りかかることが最善の道だと判断したのである。

2001年1月、高橋利行氏（当時ヨーロッパ・アフリカ課長）が、コンゴブラザビル教会特命代表に任命され、現地で指揮を執ることが決定された。本格的な復興への第一歩を踏み出すことになったのである。パリで療養中のノソंगा会長にはその一方で、コンゴ伝道におけるそれまでの功績に配慮して、勇退後の生活に関してさまざまな条件が提示された。

この決定が実質的に機能するには、紆余曲折がありしばらく時間を要した。教会の存続に関わる問題もあったが、この決定がそれ以降の教会の復興、またバゼビバカ・ピエール5代会長の就任（2003年6月）に至るための大きな転機であったことには間違いない。この間の教会で起きた詳細に関しては、『海外部報』466号～470号に「教会復興の歩み」として報告しているので、そちらを参照してもらいたい。また、現在のコンゴブラザビル教会で行われているさまざまな活動、とりわけこの2000年以降から始められた活動に関しては、今年3月に既刊の『コンゴ伝道の諸活動』（おやさと研究所編）にまとめられているので、ここでは触れないことにする。